

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第1号 2015年8月1日

「不登校について学び・つながる会」の実践(2014年度)<sup>†</sup>

川原誠司\*・阿部佳保里\*\*・稲田若恵\*\*・原 裕子\*\*

宇都宮大学教育学部\*

宇都宮大学卒業生\*\*

概要 本実践は、第1筆者が以前の活動母体であった教育学部附属教育実践総合センター教育臨床部門(2013年度で廃止)で行っていたものの継続的活動である。本会の以前の実践について報告したが(川原, 2010)、本年度の実践活動についても同様に報告するものである。会を通して、不登校に対する保護者の困惑や学校の対応の差、情報の不透明さなどの問題が浮き彫りとなり、また保護者自身の課題も浮き彫りとなり、会を行う意義とそこでの知見を学校現場に何らか還元していく必要性を感じさせた。

キーワード：不登校、保護者の対応、協働的な会

## 1. 本実践の趣旨【川原】

## (1) 本実践に至るまでの経緯と現状

「不登校について学び・つながる会」の名称で実施している本実践は、2014年度で4回目となる。第1筆者は、以前に不登校の子どもを対象にした不登校プログラムを実践していたが(川原, 2005など)、参加希望の人数は少なくなっていった。近年は学校の中でも学校外でも不登校の子どもを受け入れる仕組み(場所)は漸増し、大学内で行うニーズは強くないと予想された。

その一方で、保護者は子どもへの関わりかたに悩んでいることが子ども対象のプログラムの傾からうかがえ、また、個別的教育相談においても保護者の不登校関係の相談申込は多い。さらに、学校現場でも不登校に関しての対応について困惑する教員が相応数いることもうかがえた。

したがって、不登校の子どもに対応する大人が集まり、その対応について考えてもらう機会というもの、子どもに直接対応することと同じく重要であると考えた。現在は組織上の不安定要素が大きい

ため、毎年度の安定的な実施は困難だが、協力学生の助力が得られ、授業や研究等の他の業務とも両立できる年度には開催するように心がけている。

## (2) 本実践をおこなうにあたっての留意点

本実践は「学び」「つながる」という両側面を重要視している。不登校について大人が集まって自分の不安を打ち明け、同じような立場でのつながりを作るといったつながりの側面は重要であるし、不登校やひきこもりでの親側の孤立を防ぐ。本実践においてもそのような関係づくり(relation)の要素は重要視している。

しかし、つながるだけでは、相憐むことに終始し、お互いの状況を互いに正当化し(必死に肯定化しようとし)、とり得るはずの改善策がとられない危険性もはらんでいる。セルフヘルプの集団は、感情的な対処の面からは同じ立場としての大きな効力をもたらす可能性が高いが、集団の方向性によっては問題解決の点から必ずしも前向きな策を出すわけではないこともあるように感じる。そこで、学びという要素を加えている。ここでの学びというのは、正しい答えを導き出すというようなものではなく、問題点や個人差をを浮き彫りにすることで、自らのあり方を振り返ってもらうという内省(reflection)の機会を持ってもらうことであり、その中から自分にできる事を見つけてもらうことである。

<sup>†</sup> Seishi KAWAHARA\*, Kahori ABE\*\*, Wakae INADA\*\* and Yuko HARA\*\*: Practice in "the Meeting of reflection and relation about school non-attendance"

Keywords : school non-attendance, parenting, collaborative meeting

\* Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Graduates of Utsunomiya University

(連絡先: kawahara@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

## 2. 実施の詳細【川原】

### (1) 本年度の特徴

2014年度は学部内で活動場所の移転問題があり、それについての見通しを立ててからおこないたいと考えていた。結局見通しが立たないまま10月開始での計画を立てて募集し、実践を開始した後に、12月末を目途に活動場所の退去が指示されるという状況となった。実施側自体が非常に不安定でストレスフルな状況であった。

過去の同会の実施では、5月からの月1回開催で10回を超えるものであったが、本年度については10月開始の月1回開催の、計6回となった。

本年度に会を開催できたのは、学部授業「カウンセリング実習」を受講した学生スタッフ（本稿の第2～4筆者）が3名いたことも大きかった。学生スタッフ参加は、会の円滑な運営にも、参加者への学びにも、学生スタッフ自身の成長にも貢献した。

### (2) 実施日時、実施内容、実施形式

開催内容を表1に掲載した。今回は期間が短く回数が少ないこともあり、6回分の開催日時を募集時に明示して、その日程で参加可能であることを応募条件にした（これまでは、初回のみ日時を決めて、

表1 2014年度の「不登校について学び・つながる会」の概要

第1回；2014年10月18日（土）	13:00～16:00
ガイダンス（ルール説明）、自己紹介	
初回 RCRT 実施	〔参加者 12 名〕
第2回；2014年11月15日（土）	13:00～16:00
学校との関係	〔参加者 10 名〕
第3回；2014年12月13日（土）	13:00～16:00
親子のコミュニケーション	〔参加者 11 名〕
第4回；2015年1月12日（祝）	13:00～16:00
不登校への関わり方から見える自分の立ち位置	〔参加者 10 名〕
第5回；2015年2月14日（土）	13:00～16:00
関わりに必要な意識（エゴグラムの意識パレンスの検討）	〔参加者 10 名〕
第6回；2015年3月14日（土）	13:00～16:00
RCRT 実施、感情表出実習、情報交換会	〔参加者 10 名〕

その後は次回予定をその都度決めていた）。

実施内容については、参加者の意見を聞いて企画した回もあったが、短期間での完結した内容にするために基本的に第1筆者の方で構成した。

実施にあたっては、事前に簡易な宿題を呈示して自分の経験や考えについて事前提出してもらった（e-mail上でのやり取り）。それを参加者分まとめて会の際に呈示して、参加者が共通点と個人差を意識できるようにした。学ぶ際には、話を講義するだけでなく、参加者同士の話し合いや学生スタッフを交えての実習もおこない、多様な形式にした。

なお、第2回のときに新聞社からの取材依頼があり、参加者に同意をとった上で見学等を許可した（<http://www.yomiuri.co.jp/local/tochigi/feature/CO013131/20150126-OYTAT50000.html>〔2015年3月31日時点で記事閲覧可能であることを確認〕）。

## 3. 実施を通して得られた知見【川原】

### (1) 短期間での実施の利点と問題点

例年より短期間での実施であったため、継続性を確保するため6回分の実施日時を示して実施したが、これが参加者のスケジュール確保につながり、継続率が高くなったように思える。参加者の側も6回分なら予定が確保しやすかったようにも思える。

その一方で、6回という回数では、参加者同士の率直さが出てくるにはやや短いという感じを受けた。各回の後に行う学生スタッフと教員とでの振り返りにおいても、第5回や第6回になって参加者同士がいろいろな話をしていたことが語られていた。

期間が短く回数が少ないことによって参加しやすさはあるが、関係性の深化は弱くなる。この相反する要素をどのようにするかは難問と言える。

### (2) 防衛的な部分へのアプローチ

当初の応募時点で参加を了承した方が12名おり、第2回目からの参加を了承した方1名を含めて計13名の登録であった。その中で1回目に参加を取りやめた方が2名、後半欠席が続いた方が1名いた。

1回で取りやめた方は学校関係の方々であった。会の趣旨を募集のポスターに書いていたにもかかわらず、また職業的守秘義務については守って話してよいことを初回時にルールとして伝えていたが、課題をおこなうことや保護者とやり取りすることに抵抗があったようだ。取りやめの理由についても後ろ

向きな印象で、「すぐに役立つものが一方的に与えられてるつもりだった」という認識のメールを読むと、専門職としての見識を疑ってしまいたくなる。不登校について学校教員が正面から取り組んでくれないという保護者の苦悩は良く語られるが、このような出来事に遭遇すると「そのときの担当教師次第でどちらにでも転んでしまう」と暗澹たる気持ちを抱いてしまう。

会に継続参加された人は前向きに取り組んでいるように見て取れたが、自分のそれまでのスタイルや見方との葛藤に苦慮している方もいて、殻を強く持っている人もいたようであった。それらの殻にアプローチするには回数的にも難しい部分もあったように思う。ただ、継続して出席できたことを考えると、その殻を保持しておかないと自らを保てない部分があるかもしれない、その点では1対1の面談と異なる集団の会への参加として仕方のないことかもしれない。

### (3) 具体的な働きかけを通しての気づき

会の中ではできるだけ「気づき」が得られるように努めた。学びの際は参加者の苦手な部分にもアプローチするよう心がけたが、「だからダメだ」とするのではなくて、「さて、この状態を自分でどう思いますか。どうしていきますか」という問いかけになるように意識した。

それを実感して気づいてもらうために具体的な働きかけをおこなった。参加者同士での作業や学生スタッフを子ども役に見立てたコミュニケーション実習、感情表出練習など、正解を教え込むというのではなくて、うまくいかないことを実感してもらうということを主眼に置いた。参加者はそれらの活動の中でうまくいかない様子を認識できたようだ。それらが内省力の進歩につながる場合もあり、ところどころで語る言葉や、第1筆者宛に個別に送ってくるメールの中にも反映されていることがあった。

気づきからさらに一歩進んで、最終的にはそれらをどのような実行可能な形にしておこなうかということが重要だが、それについては発展的に個人的な治療関係の中で検討したり、その前提での約束をした上で進めていくことだと感じる（心理的負荷の面からも）。今回の会の場合には、参加者のその後の行動に資する気づきとなるという段階に傾注した。

### (4) つながりの形成

参加者同士が次第に関係を取り、最終的には会の終了後にも互いに連絡を取り合う（お互いの連絡先を交換しよう）という自発的な動きも出てきた。抵抗なくやり取りができる関係が生まれてきたとしたら、それはこの会を第一歩として新しい関係ができたことになると言える。

この出来事に際して、連絡先記入については任意であり強制はできないこと、筆者の手元にある個人情報提供は提供できないことなど、留意点については第1筆者より伝えてあることを申し添えておく。

## 4. 参加学生の実践的学びへの貢献【阿部・稲田・原】

第2～4筆者までは、学生スタッフとして会に参加していた。筆者らにとっては通常授業では経験できない実践活動で、学ぶことも多かった。この会から学んだことをいくつかの視点でまとめる。

### (1) 不登校という状態の認識の深化と多様化

これまでは「不登校」というだけでステレオタイプな認識を持っていたかもしれない。「不登校」の印象は否定的な部分が大きく、自分自身にはあまり関係のないことだから分からないと短絡的に思っていた傾向もあったように思う。

しかし、会の中でのやり取りを見てみると、不登校の子どもとその子に関わる親というもののイメージが共通点で明瞭に集約される部分がありつつも、詳細についてはそれぞれのケースは異なっており、一概に何が良くて何が悪いというものは無いように感じられた。子どもにはそれぞれの思いがあり、その子の親も各々異なる特徴を持っており、安易にひとくくりにすることは危険であると痛感した。

不登校の子どもや家族が抱える問題は、時間の経過とともにより複雑で根深いものになってしまい、改善の切り口や目指す状況や目標が分からなくなってしまう難しさがあるように思った。ある参加者の方が、「不登校の子に対して、どうしたらいい」というマニュアルがあれば不登校なんてなくなっている。一人ひとり違って、正解がないから難しい」と語っていたのが自分の中に重く残っている。

### (2) 実習等から気づく親子関係の難しさ

不登校という状況の課題や不安は、子どもと学校との関係のみにとどまらず、親子の関係にも多大に

影響するということを実感した。学校との関係を解決することと同時に（あるいはそれよりも）、普段の親子の会話や、再登校や進路に関する親としての働きかけなど、家庭内での関わり方について参加者の多くが悩んでいたことが印象的であった。

コミュニケーションについてのロールプレイを行ったときに、筆者らは子ども役を担当したが、そのときに「優しく接しているようだけれど全然話を聞いてくれてない」と感じる話しかけられ方もあり、この感じだと子どもがつらくなるだろうと考えることもあった。また、表情の実習をしたときには、楽しい表情を作ろうとしているが目は笑っていないように見えてしまうことや、逆に不満で怒っている表情を作ろうとしているものの、どうも不満な感じが伝わってこないことなどがあった。学生の立場なので尻込みしてしまった面もあり、もっと率直に指摘できればよかったかもしれないが、自分が今回の参加者の子どもだったらと考えたときに思いを馳せることはいろいろあった。

また、表出することだけでなく「聴く」ということの難しさも痛感した。ロールプレイの子ども役として、自己否定的な（しかし本心とは少しずれた）感情をこめて親役にぶつけたが、親役の参加者の中には「そんなことない」というような励ましや慰めを意図した打ち消しの言葉をずっと返すような人もいた。気持ちが救われる部分もあるが、こちらの落ち込んだ気持ちがどのようなものなのかをしっかりと向き合ってくれる感じがあまりせず、「もういい」という思いにすんなった瞬間があった。その一方、グループの他の方々は、一生懸命励ます様子を「すごい」「子ども思い」などと褒めていた。

そこから見てきたのは、子どもを思いやっていると行いう親の対応と、子どもが求める親の対応との間にずれがある危険性であった。不登校に対応していく中で、親が必死になっているのにこのようなずれで子どもに伝わっていかないとしたら、その苦悩はなかなか解消されないのではと危惧した。

### （３）自分自身の課題としての展開

会自体の活動は参加した方々の学びが主眼であったが、それらの活動を通して、筆者らのあり方についても考えさせられることが多かった。

前節で「聴くこと」の難しさを述べたが、筆者らの聴き方の癖にもなっていることを感じた。相手の

ネガティブな気持ちに対して励ましや良いことを言おうとしてしまう姿勢は、相手にとっては聴いてももらえている感じがしないということに気づいた。ある発言には、様々な感情が含まれており、なぜ相手はそうのように言ったのかについて知ろうとすることで、トラブルが回避できると感じた。同じような意味の言葉でも不安になったり嬉しくなったりと異なる感情を持つ経験を思い出し、相手の言葉を知ろうとする姿勢が大切だと感じた。

また、表出においても考えることがあった。表情について取り上げた回で、「心地よい」や「興味深い」などの表出課題において参加者の多くの表情がとても硬く感じられたことは既に述べたが、しかし、その懸念は筆者ら自身の出し方にも符号すると実感した。「目は口ほどに物を言う」はまさにこのことであり、人に安心感を与えるのも不安を与えるのも表情が重要であることを深く感じた。

スタッフとして、しかし専門職でもない学生という思いで参加することには、様々な戸惑いや迷いがあった。会での実際の会話では詳しく話を聴けなかったり、他の話に移ってしまったり、うまくいかないと感じることも多かった。自分が発する一つひとつの言葉が失礼にならないか、逸脱していないかなど不安に感じることも多かった。また、参加者と同じ立場ではない筆者らに話してもよいと思ってもらうためには、どのような姿勢で臨めばいいのかと悩んだ。

「～ですね」と自分の感じたことを時々押し付けけるような言い方をしたり、どうしても先入観を持って話を聞いてしまうこともあったことは反省点である。

やはりファシリテーターとしての役回りはまだ難しく、参加者には筆者らの未熟さを申し訳なく思うところがある。そのような時でももっとまっさらな気持ちで話を聴くことのできる姿勢や力、話を丁寧に掘り下げる力は、社会生活でも必要になってくることでもあると推測できるので、今後より意識していきたい。

## 5. 今後の課題【川原】

### （１）活動場所の再構築

2. の（１）において活動場所が不安定になったことを述べたが、移動先の活動環境について従前のように整えることはできなかった（学部単位での配

慮はなかった)。机や椅子もない状態からの再スタートとなっている。

教育臨床心理に関する意識は、流行り廃りの中で浮き沈みが激しく、現在は他の流行りの中で本学部の中では見る影もないように思う。「問題が起きた時だけ慌てて実施していたように見せかけたり、目新しい対策を立てたりする」というのは、特にこころの問題の時には大きいと危惧している。

さらに、専門的に関われる学内資源の間でも臨床的な活動については温度差がある現実もある。組織的に活動を構築する術や資源は今の第1筆者にはなく、可能な活動を地道に継続しながら、上層部の理解や配慮を待っている状態である。

#### (2) 保護者への具体的働きかけの機会提供

今回の会での実習の様子を見ても、具体的なポイントについて気づいてもらうことは重要であることが分かる。しかし、現実の子どもの不登校への保護者の対応として、学校にしても専門家にしても「温かい目で見守る」「長い目で見守る」というような曖昧な言い方が往々にしてある。発生時当初の拙速な対応に留意するという点では有意義な可能性があるとしても、長期化して現実生活の適応課題を逃し続けるようになった場合には非常に危険なスローガンともなる。

その意味では保護者に継続的に啓発していくことも重要であろう。ただし、マニュアル的な伝達では実感を伴わないので、自らの状況を内省するのを支えることと具体的に働きかけ方を伝えることとのバランスを保持できるような機会にしていける必要があるだろう。

#### (3) 学習・進路についての意識涵養と情報提供

特に中学生年齢以上の保護者の意識として、子どもの進路（ひいては学習状態）について心配する声が多かった。このことは以前に実施した会においても挙げられていた話題であった。現在は以前に比べて不登校の子どもの進路の選択肢が多様にあるがゆえに、学校側も進路のことを子どもに明確に確認していくことよりも、触れずに先延ばしにして、ギリギリの段階になって限られた候補のみを選ばざるを得ないという状況も出てきたように感じられる。

前節で挙げた現実生活の適応課題という点でいえば、子どもの学習・進路の問題は最たるものといえ

るが、教育相談の際の保護者の話を聴くと現実的には遠ざけられていることも多い。「下手に無理強いしない」という配慮かもしれないが、重要なことから目を逸らして、問題を深淵化している恐れが大きいように思える。

進路の問題については巷に様々な見解が流れているので非常に難しいが、「……児童生徒の将来的な社会的自立に向けて支援することであること。したがって、不登校を『心の問題』としてのみとらえるのではなく、『進路の問題』としてとらえ……」（文部科学省「不登校への対応の在り方について」平成15年）という視点に立ち、今後の成長のために支援していく姿勢を意識していく必要がある。

#### (4) 学校教員の啓発と意識涵養

学校教員全体に一般化するわけではないが、今回の取りやめ事例や第1筆者がおこなってきた教育相談で見聞きする学校教員の態度からは、学校教員の不登校への意識というのは温度差が大きいという印象がある。こころの様子へのアプローチについては、筆者が担当する教員免許状更新講習での受講生の様子を見ていても、個人差が大きいと痛感する。

他にも多くの生徒がいて、学級経営する教師からすると不登校への子どもの対応は敬遠されがちな印象は拭えないし、そのみにエネルギーを注げないのも現実である。しかし、すべての対応を教師個人や学校に負わせるということではなく、子どものために学校教員、担任教員だから今ここでできることを学校関係者に認識してもらう必要はあるだろう。

#### 引用文献

- 川原誠司 (2005) . 不登校の子どもを対象としたプログラムの経緯と課題——4年間の取り組みから見えてきたもの—— 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 28, 35-46.
- 川原誠司 (2010) . 不登校に関する協働的な会の運営の成果と課題 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 33, 1-8.

(2015年 3月31日 受理)

